萬葉に於て日本的感情を見る（七）

東京女子高等師範學校教授　石井庄司

五、大君の命かしこみ

萬葉集卷三の中程に、田口益人大夫といふ人が上野の國司に任ぜられて、赴任の途中、駿河國の淸見が埼で詠んだといふ歌が二首出て居ります。

　廬原(いほはら)の淸見(きよみ)の埼の三保の浦のゆたけき見つつ物念(ものもひ)もなし

　晝見れど飽かぬ田兒の浦大君の命かしこみ夜見つるかも

田口益人の傳記は、よくわかりませんが、續日本紀卷第三、文武天皇の慶雲元年正月七日の條に、從六位下田口朝臣益人が從五位下になつたことが記されて居ります。また同卷第四、元明天皇の和銅元年三月十三日のところには、從五位上田口朝臣益人を上野の守となすと出て居ります。萬葉集の方では年代はよくわかりませんが、かやうに續日本紀を見ますと、田口益人が上野の國司に任ぜられたのは和銅元年卽ち今から千二百三十四年前のことになります。それから萬葉集では「上野國司」とあり守か介か椽かよくわかりませんが、續日本紀によればはつきり國守であることもわかります。

都を出發して、東海道を下り、下野國に赴く途中詠んだものでありますが、第一首は、今の興津のあたりから三保の松原の海邊のゆつたりとした光景に眺め入つた作であります。あとの一首は、嚴密には興津を過ぎてからの作と思はれます。晝間に思ふ存分眺めても飽くことのない田兒の浦のよい景色を、大君の命をかしこみ、夜に見ることであるといふ意味であります。ここで注意したいのは、「大君の命かしこみ」といふ言葉であります。詔を受けて、職を國守に任ぜられた者は、成るべく早く任地に下り、職務を勵行すべき筈であります。從つて途中、景色がよいからとて、私に滯在することもかなひません。天皇陛下の仰せ言を受け、かしこまりましたとて、出てきた身でありますから、滯溜もかなはず、よい景色の田兒の浦をば夜に見ることであるといふ意味であります。

「大君の命かしこみ」の言葉は、萬葉集中、約三十箇處に見

えて居ります。非常に多くの人が用ひた言葉であります。そこに萬葉時代の人々の志のあるところを見ることが出來ませう。年代的に申しまして、田口益人の此の歌などが最も時代の古い作といふことになります。言ひかへれば、萬葉集では田口益人あたりが始めて「大君の命かしこみ」といふ言葉を使ひ出し、それが多くの人々に用ひられるやうになつたのではないかと思はれます。「大君の命かしこみ」といふ言葉が多く使はれてゐるのは、巻二十の防人歌であります。

大君の命かしこみ磯に觸り海原わたる父母をおきて
（相模國防人）

大君の命かしこみ出で來ればわぬとりつきて言ひし兒なはも
（上總國防人）

大君の命かしこみ夢のみにさ寢か渡らむ長けこの夜を
（下總國防人）

大君の命かしこみ青雲のたなびく山を越よて來ぬかむ
（信濃國防人）

大君の命かしこみうつくしけま子が手はなり島傳ひゆく
（武藏國防人）

巻二十にある諸國の防人の歌は、孝謙天皇の天平勝寶七年二月のことでありますので、田口益人が上野國に赴任した和銅元年からは、實に四十七年の後の事となります。防人たちが田口益人の歌に影響されたといふのでなく、東國の人々の間に「大君の命かしこみ」水火の難をも避けないといふ堅い信念が出來てゐたためと考へられます。

なほ同樣の作は、巻十四の東歌の中にも見えて居ります。

大君の命かしこみ愛し妹が手枕離れ夜立ち來ぬかも

これは作者の不詳の歌でありますが、やはり防人などが愛する妻に別れて出かけて行くときの吟詠と思はれます。大君の命とさへいへば、絶對的のものであつて、如何なる苦しい事をも耐へ忍ぶといふ意氣が見えるのであります。額に矢は立つとも、そびらには矢を立てないといふ、進むことを知つて、退くことの知らない。東國武士の面目の躍如たるものがあります。

このやうな意氣は、また「海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、大君の邊にこそ死なめ、かへりみはせじ」の精神と相通ずるものであり、全く我が國獨特の精神といふことができませう。

巻十三の「み吉野の眞木立つ山に」といふ長歌の中に「大君の遺のまにまに」とあり、その所が或本では「大君の命かしこみ」となつてゐるといふ事であります。この「或本」とは、萬葉集の編纂當時既に存した異本と思はれ、或は作者の再案であるかもわからないのであります。兎に角「大君の命かしこみ」といふ事と「大君の遺のまにまに」といふ事とが、ほ

ぼ同様の氣持を現はしてゐるものであるといふ事がわかるのであります。巻十七の大伴家持の作品の中には幾首も「大君の遣のまにまに」といふ言葉が用ひてあります。天皇陛下のお遣しに從つて、越中の國に赴くといふ事であります。

巻三に石上大夫歌として、「大船に眞梶繁貫き大君の命かしこみ磯みするかも」とありますが、それに和する歌として「もののふの臣の壯子は大君のまけのまにまに聞くといふものぞ」といふのが載せてあります。かういふこころからしても、兩者の關係がほゞわかるやうな氣がいたします。そして「大君の命かしこみ」も「大君の遣のまにまに」といふ言葉も共に、千年の後、今日もなほ生き生きとわが國民の間に働いてゐることは、日常私どもの眼に見、耳に聞いてゐるこころであります。古典の世界は、決して遠いものではなく、全く現實に生々と働いてゐるものなのであります。そこに、我が國柄の尊さがあり、また我が古典の特色があるのであります。萬葉集は、古くして、しかも新しい今日の聖典と申してもよいのであります。

次に「大君」といふ言葉でありますが、私は今總て「大君」といふ文字を使つてきましたが、萬葉集の原文では色々の文字が用ひてあります。煩をいとはず全部數へあげてみますと、十數種になります。漢字では「王」をオホキミと讀みます。巻三のはじめにある柿本人麿の雷岳で詠んだ作「おほきみは神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも」も、或本では「王」となつて居ります。その他「王」といふのは十五ばかり例があります。また「大王」と書いてもオホキミと讀みます。これも仲々多く二十四ばかり例があります。それから「皇」「大皇」「太皇」もいづれもオホキミであります。また「天皇」といふのもオホキミと讀みます。例は巻一の終に「天皇の命かしこみ」といふのがあり、その他六つばかり例があります。「大君」といふ文字は巻十八に一つの例があるだけであります。なほ「多公」といふやうなのもあります。

以上はいづれも漢字で書いてありますので、本當はどう讀むのかよくわからないわけであります。そこで全部一字一音の假字書になつてゐるのを調べてみますと、大體次のやうになつて居ります。

一、於保伎美。
二、於保伎見。
三、於保吉美。
四、於保吉民。
五、意保伎美。
六、意富伎美。
七、憶保枳美。

ほとんど同じやうでありますが、よく見ると少しづゝ違つて居ります。四字のうち、一番はじめの字は、「於」「意」

「憶」の三種でありますが、これはいづれもア行のオの假字であります。次に第二は「保」「富」の二種で、淸音のホといふことになつて居ります。第三は「伎」「吉」「枳」の三種になります。江戸時代の石塚龍麿といふ人の研究によりますと、萬葉集の假字の使ひ方には嚴密な規則があつたやうであります。この「キ」の假字については、通用するものと、通用せぬものと二種類あつたといふのであります。さういふことは、石塚龍麿の假字遣奥山路といふ本に出て居ります。最近に至つては橋本進吉博士によつて一層詳しく研究を進められ、只今では上代特殊假字遣として、萬葉集研究には大事な研究となつて居ります。それによりますと、此の「伎」「吉」「枳」は淸音に用ひられて全部共通のものといふことであります。同じ假字でも「奇」とか「貴」といふのは、「伎」「吉」「枳」とは違つた假字をいふことになります。そこでオホキミのキは同一種類の假字で書かれてゐるわけであります。そしてそれは濁る音でなく、「キ」と淸音に讀むことになつて居ります。この頃「オホキミ」と「オホギミ」との區別が注意されて來てゐるのでありますが、なほラジオなどでは知名の方も依然として「オホギミ」と濁音に言つて居られるのを耳にいたします。一體「オホギミ」と濁つていふのは、後世の言葉でありまして、意味は親方といふやうなものになります。それは、すめらみことといふ「オホキミ」とは大變違つたものになるのであります。ところが萬葉集ではつきりと、キと淸音で書かれてゐることは以上の通りであります。オホキミとオホギミとどちらが正しいかと迷つて居られる方には、どうか萬葉集例を示して戴きたいのであります。

　ちよつと横道にそれましたが、第四は「美」「見」「民」の三種、これも通用の文字であります。色々文字の種類はありましたが、要するに一種の假字であつて、少しも疑問はないのであります。文字の使用の上にも、かやうに嚴密な區別があつたといふ事は、當時の發音の上に嚴重な區別が立てられてゐた證據と思はれます。そしてその純粹性を保つといふやうなところに、また國體の尊嚴を保つといふ事とも一脈相通じた所があるのであります。オホキミといふ一語ではありますが、言葉の純粹さといふ事と國柄の純一さといふ事とが一致するといふよい證據になると思ひます。

　假字遣といふやうなことは、どうでもよいといつて、便利主義に流れてしまふのは、よほど考へねばならぬこととなります。また少々脇へそれましたが、萬葉集の中に、私どもはかういふ忠君愛國といふ純粹感情を見ることができるのを非常な幸と思つて居ります。萬葉集が單なる歌を集めた本ではなく、我が國の尊い古典であるといふ意味は、かういふところにあるのであります。　（つづく）